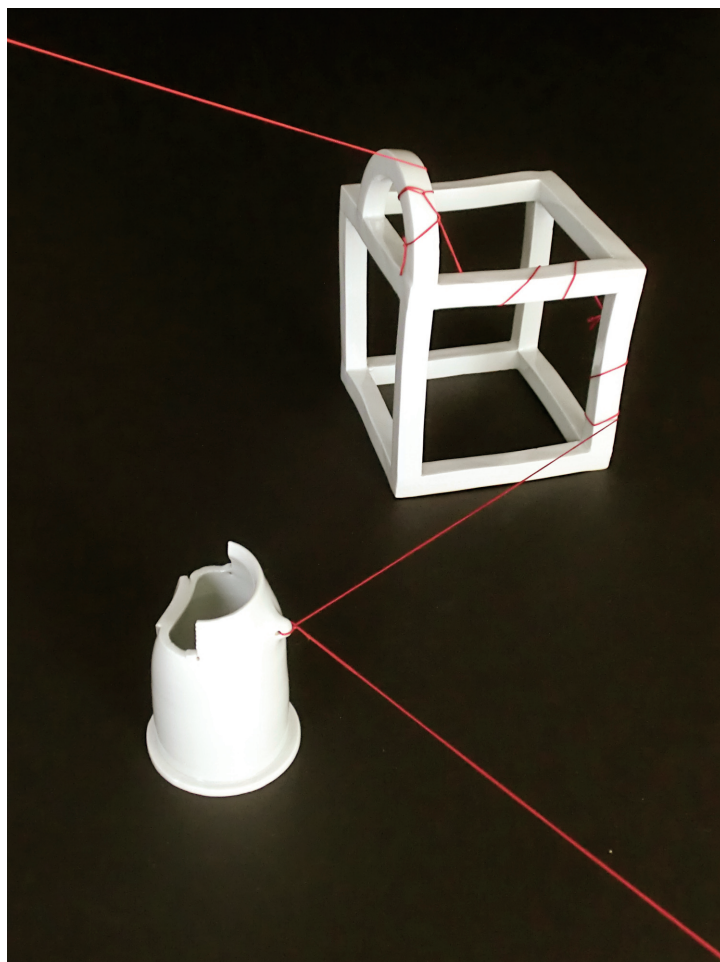


アートギャラリー

白 磁
= 奈野 =

石 田 成 昭



奈野 5 3 7 高 24cm

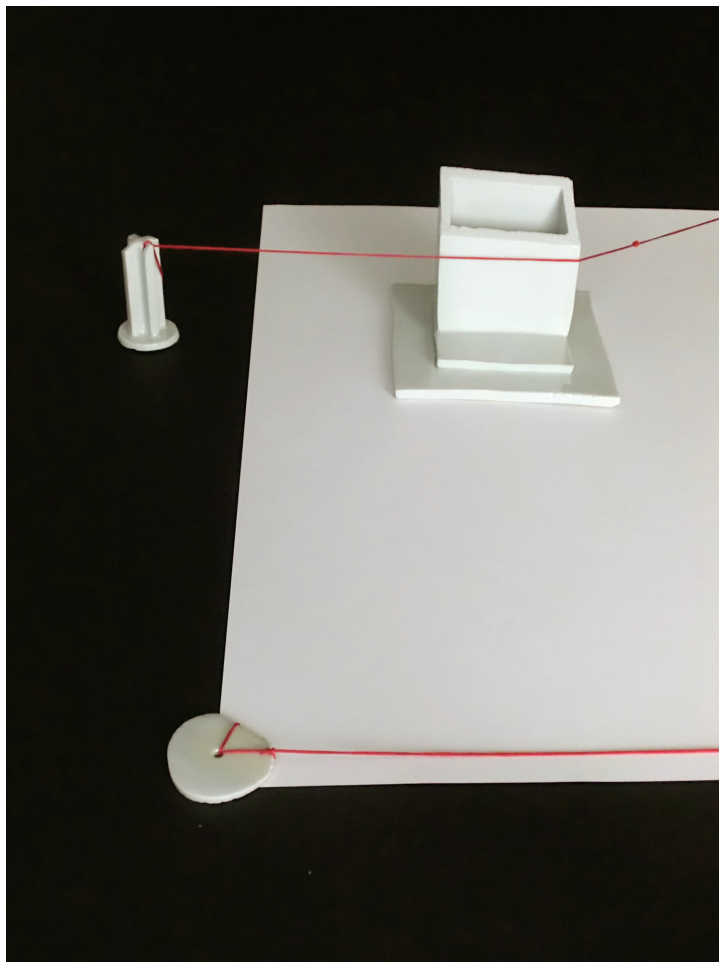
—奈野—

焼物を始めて間も無い頃、もう50年も昔の事になるが、京都府立総合資料館で出合った石黒宗磨の身の丈一寸ほどの小さな香合に私はすっかり魅了され、未だにその時の印象が忘れられない。又最近では兵庫陶芸美術館で実見したハンス・コパーの小さなキクラデス・フォームも深く心に残っている。どうも私には大きい作品より小さな作品を良しとする生まれつきの感性がある様だ。作品は慎ましく小さいほど良いと思っている。20年前焼物の素材を陶土から磁土へと転じた折、作品番号の頭に奈野という言葉を書いた。ナノは極小を意味するラテン語で10億分の1を表す単位の接頭語である。ナノ秒とかナノメートルなどとして使われている。小さくても何か密度があり、力が内へ内へと凝縮してゆく様な作品を作りたいと日頃から願っている。奈野の漢字は、奈良の飛火野。から(奈)と(野)を拝借した。高校時代古都奈良のお寺巡りを始めたが、今の自分の持っている美の概念、創造の源は間違いなくこの時この場所で形成されたものと思っている。飛火野に点在する神社仏閣、それにおさまる仏達、崩れかけた土塀、瓦の破片、のんびりと草を食む鹿の群れなど、その時の風景が鮮明に今も頭に残る。とりわけ興福寺の宝物殿は胸ときめく所で、現在の整備された陳列ではなく、当時は薄暗く雑然としていたが、阿修羅像の細身のすりと延びた手足の向うに、あの仏頭が見えその眼差しは久遠の彼方を見つめていた。

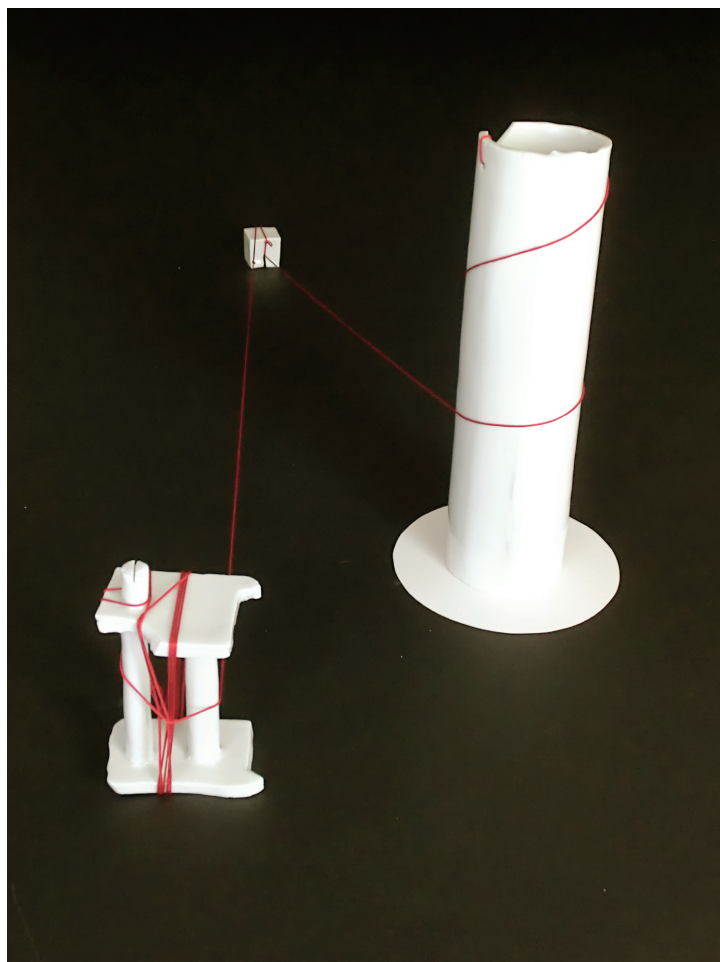
近年、世の中全てのコト、モノが大きく巨大化する一方だが、何か大切なコトが忘れられ、掛け替えのないモノが失われてゆく様に思えてならない。

「人の幸せも小さい方が良いのだよ」と学生に話すと、怪訝な顔をするので「もう少し年を重ねるとわかる」と答えておいた。

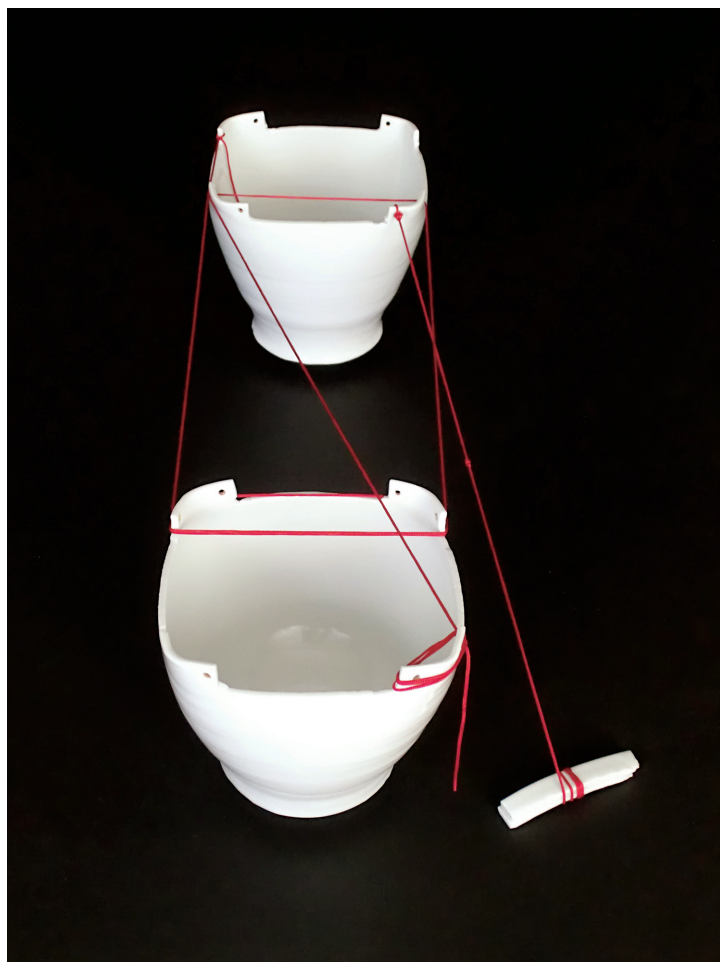
奈野の名は あせび花咲く 飛火野の
五重にひびく 白鹿のこえ



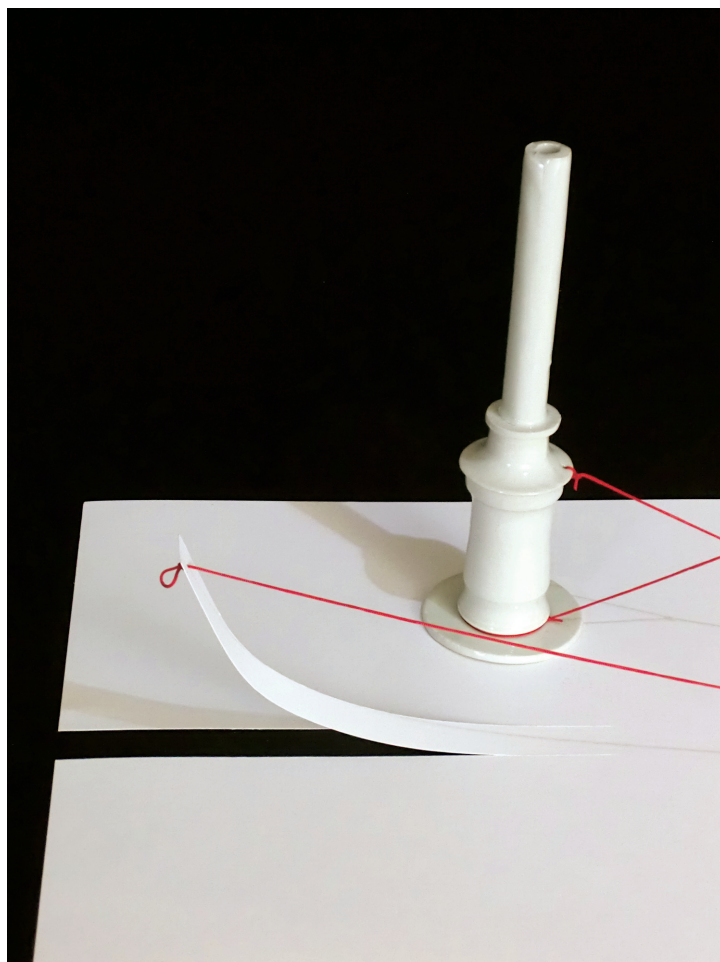
奈野 5 2 9 高 11cm



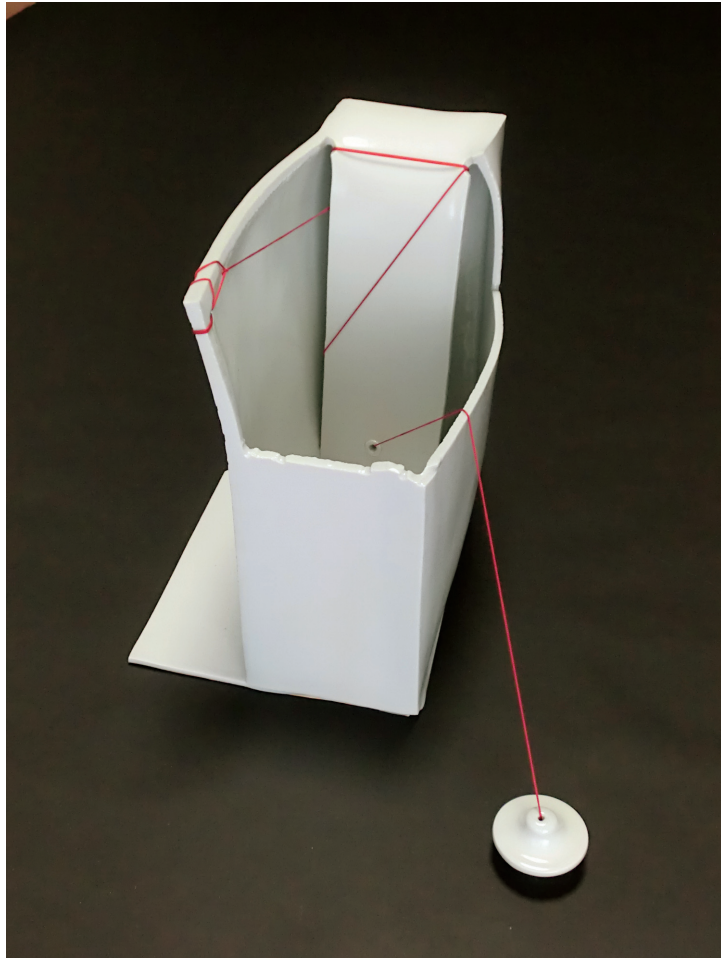
奈野 549 高 29cm



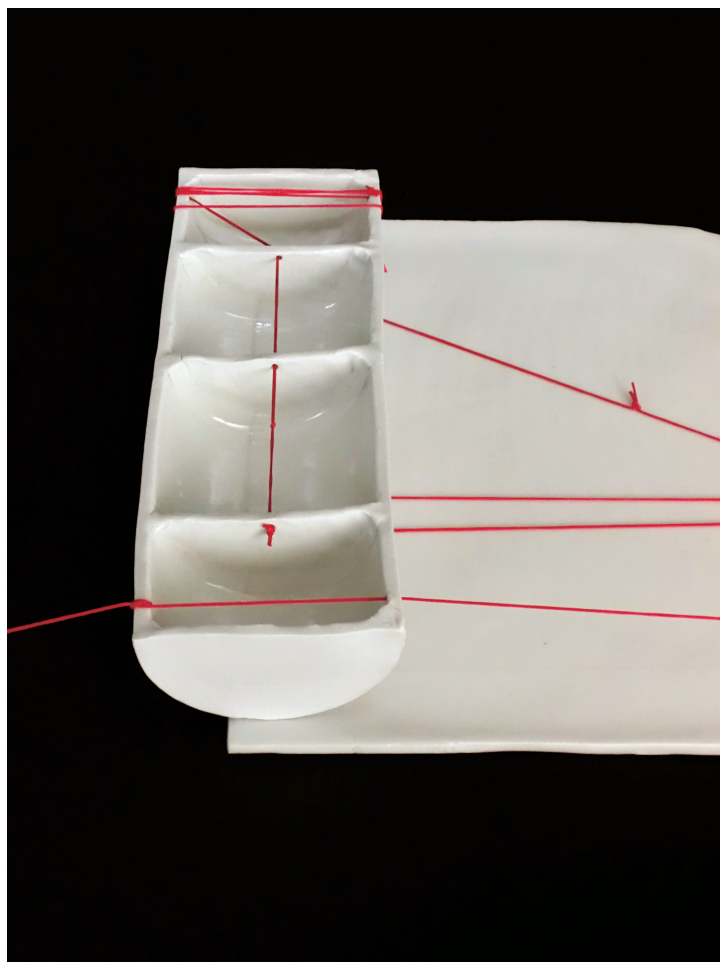
奈野 5 3 1 高 15cm



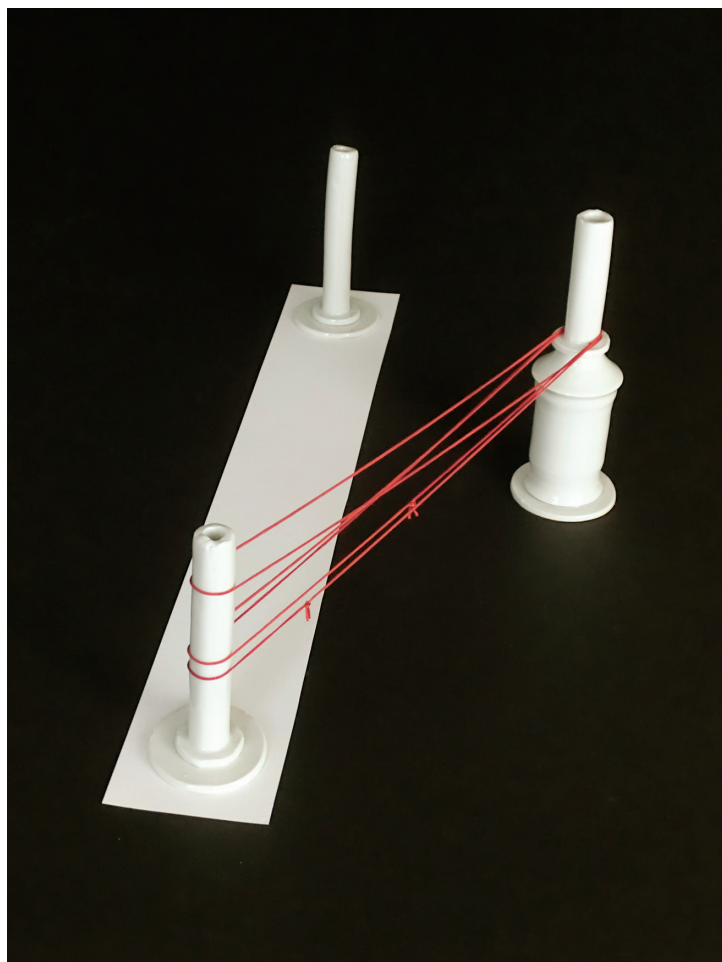
奈野 5 5 4 高 25cm



奈野 5 3 0 高 32cm



奈野 5 3 6 高 5cm



奈野 5 3 8 高 18cm